

西尾城大手門跡発掘調査現地説明会資料

令和6年2月18日(日)
西尾市教育委員会
文化財課

所在地 西尾市幸町・錦城町
調査面積 500 m²
調査期間 令和5年12月～令和6年3月
調査理由 史跡整備事業に伴う確認調査
調査担当 株式会社イビソク名古屋支店



調査に至る経緯

西尾城は東・西・南を低地に囲まれた碧海台地の縁に位置しており、大手門は三之丸から北方向へ城下町に抜ける道に建っていました。大手門がいつ頃整備されたのか、詳細は判明していませんが、寛永15年(1638)から城主であった太田資宗が城下町を総構えとする工事に着工していることから、1600年代半ばには当地に大手門があったと考えられます。江戸時代には自然災害によって何度も城郭に被害が出ましたが、その都度修繕された記録が残っています。しかし、明治4年(1871)の廃藩後は明治政府に対する恭順の意を示すため、同年9月に大手門のほか、新門、太鼓門が廃止となり、11月に撤去されました。その後は官公庁の敷地や商業地となり現代に至っています。

今回の発掘調査は、大手門の枡形や堀の形状を確認することを目的として行いました。発掘調査の成果を活かして、来年度以降整備の設計を進める予定です。

西尾城大手門

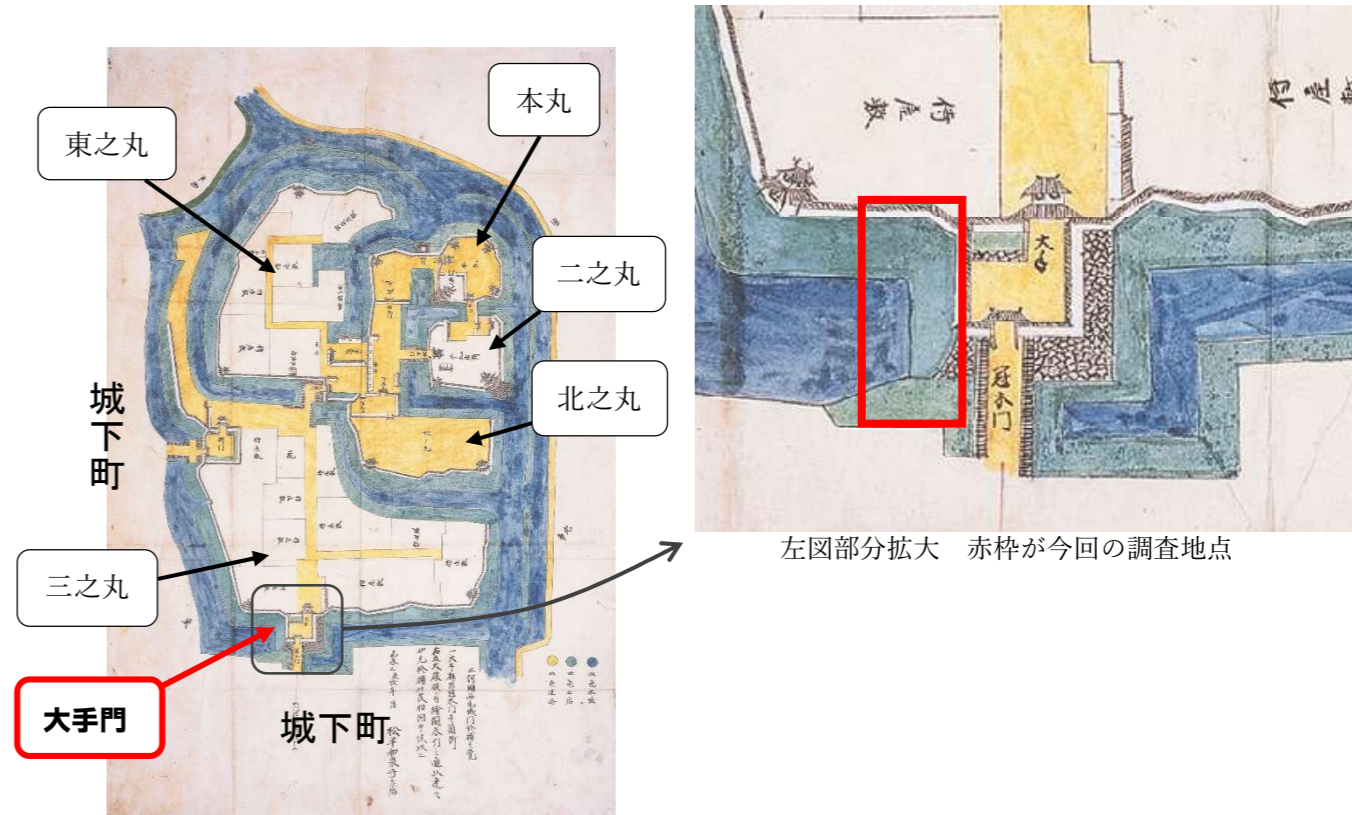
西尾城大手門は三之丸の塁線から凸状に突き出した6間(約10.8m)四方の外枡形門で、2つの門を石垣と塀で囲んでいました。

2つの門は直線上には並ばず、少しずつずらすことで外から城内が見通せない工夫がされていました。調査区と中善楽器との間の市道がわずかに曲がっているのは、2つの門のずれを反映していると考えられます。



『西尾八景(祇園会御旅所)』西尾市岩瀬文庫

大手門前の広場には高札所が設置され、祇園祭の際には、神輿を迎える御旅所が置かれる町の中心でした。



「三河国西尾城図(三河国西尾城門修補之覚)」

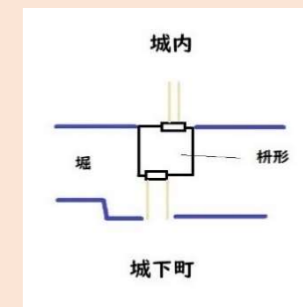
西尾市教育委員会所蔵

西尾城大手門の位置

～用語集～

大手門・・・城郭の二之丸または三之丸へ外側から通じる正面に設置された城の正門のこと。

枡形・・・城の防衛のためにわざと道を屈曲させ、通路と門の前後に広場を設けて侵入者の側面から攻撃できるようにした構造のこと。西尾城の大手門の枡形は堀内に突き出る出枡形(外枡形)という形態で、城外に攻め出るのに有利な構造になっている。



西尾城大手門の出枡形の形

総構え(惣構)・・・城下町全体を土塁と堀で囲った構造のこと。

方形周溝墓・・・弥生時代から古墳時代初期にかけてみられる墓。浅い溝を方形にめぐらして墓域を区画する。

● 調査の成果

今回の発掘調査では、大手門の枡形の北東角付近の裾部分、枡形を造成した盛り土、枡形から城下町側に落ち込む三之丸堀が確認されました。

出土品としては戦国時代の陶器、江戸時代の陶磁器、太田氏の桔梗紋が入った家紋瓦、三葉紋のある唐草紋軒平瓦などの遺物が出土しています。

このほかに、弥生時代の方形周溝墓の周溝の一部が発見されています。

調査で見つかった遺物



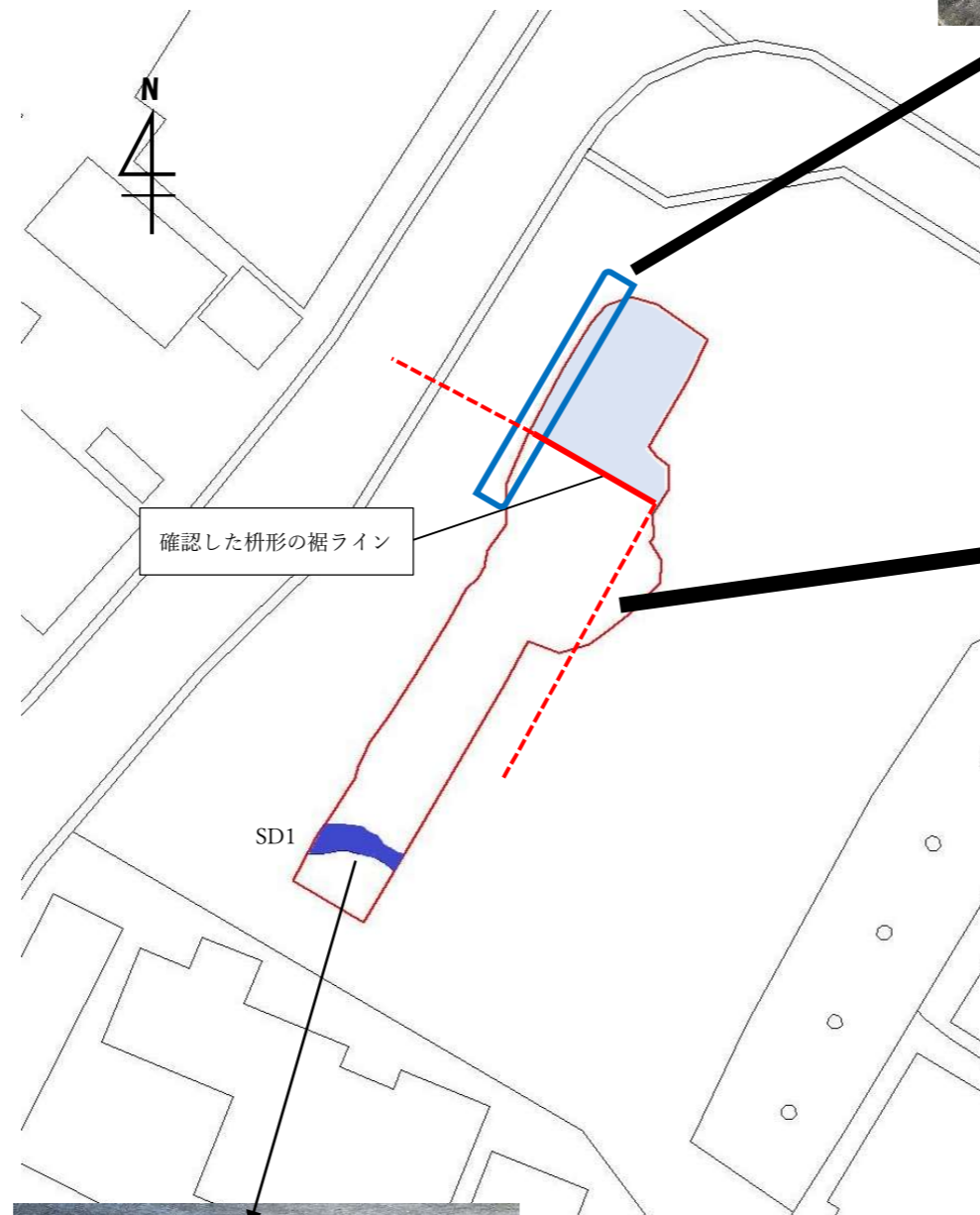
三葉文軒平瓦(江戸時代前期)



太田家の桔梗文軒丸瓦
太田家西尾在城期間(1638年~1644年)



天目茶碗(戦国時代)



弥生時代の方形周溝墓の周溝

こちらの溝からは弥生時代の中期後半(約2,000年前)の土器が出土しました。溝の形から方形周溝墓と呼ばれる墓の一部と考えられます。弥生時代の建物や墓は西尾小学校付近でも見つかっていて、この一帯に弥生時代の村があったようです。



堀の中の遺物堆積状況

大手門は明治4年(1871)に廃止となり、枡形も破壊されました。この堆積は明治時代に埋められた時のもので、瓦や礫が大量に含まれています。枡形の上面から堀底までの深さは約4.5mを測ることが判明しました。



枡形の北東角(右)と明治時代の石垣(左)

枡形は盛土によって造られていたことがわかりました。明治10年頃の絵図では枡形はすでに破壊されていたようです(下図)。明治時代の石組みは西尾銀行建設時のものと考えられます。調査中には銀行の地下室の一部とみられる遺構も見つかっています。



明治10年ごろの絵図 西尾市教育委員会所蔵